

# 清和源氏足利系仁木一族の略系譜

第56代天皇即位 在位 天安2(858)～貞観18(876) (850～880)

せいわたんのう  
清和天皇

清和<sup>これひと</sup>惟仁、文徳<sup>もんとく</sup>天皇の王子、母は藤原明子。生後九か月で兄<sup>これたか</sup>惟喬親王らを越えて立太子。

文徳<sup>もんとく</sup>天皇の崩御で九歳即位。貞観六年元服。

外祖父の太政大臣<sup>ふじわらよしふさ</sup>藤原良房が政治を主導し

貞観八年、応天門の変の年 藤原良房摂政となる。

貞観十四年、藤原良房没後は、摂政は置かなかったが、

良房の養嗣子 藤原<sup>もつね</sup>基経が政治を担った。

貞観十八年 大極殿焼亡等をきっかけに陽成天皇に譲位。上皇となる。

元慶<sup>げんけい</sup>三年 粟田<sup>あわたいん</sup>院で出家。法名は素真<sup>そしん</sup>。

京都<sup>みずのお</sup>水尾に葬ったので水尾<sup>みずのおてい</sup>帝とも称す。

清和源氏祖 ( ? ~ 916 )

さだずみしんのう  
貞純親王

清和天皇の第六皇子、母は棟貞王の娘。桃園親王と称される。

貞観十五年 親王となる。中務教・兵部教・上総・常陸・上野大守を歴任。四品に叙せられた。

源経基の父で清和源氏の祖として「武門当代相統源氏正統祖」と称されるが経基は陽成天皇  
(清和天皇の皇子) の皇子元平親王の子とする説もある。

源朝臣の姓賜 ( 890 ~ 961 )

みなもとの つねもと  
源 経基

平安中期の官人。清和源氏の祖。清和天皇の第六皇子貞純親王の子。

母は源能有の娘。第六皇子の子ゆえ六孫王と号す。

天性弓馬に達し、武略に長ずると評される。源朝臣姓を与えられた。

天慶二年 武蔵介任中に、平将門と興世王の謀叛を密告し、

天慶三年征夷副将軍となる。

同年 追捕南海凶賊使次官・太宰権少式となり、藤原純友の追討に功をあげる

鎮守府将軍・内蔵頭・右馬頭を歴任し正四位下にいたる。

摂津守 多田源氏祖 (912~997)

みなもとの みつなか  
**源 満仲**

平安中期の武将。源経基<sup>つねもと</sup>の長男。母は橘繁藤<sup>しげふじ</sup>の娘。春宮帯刀<sup>とうぐうたてわき</sup>・左馬権助<sup>さまごんのすけ</sup>・春宮亮<sup>とうぐうすけ</sup>などを歴任。

伊予・摂津・武蔵・信濃<sup>しもつけ</sup>・下野・陸奥などの守護を歴任。

従四位下鎮守府将軍にまで昇った。摂津守を契機に摂津多田に住し、多田源治の祖となった。

摂津家に接近し、安和三年(969)橘繁延<sup>あんな</sup>・藤原千晴を密告。

安和の変に発展するきっかけとなった。

寛和二年(986)花山天皇出家事件では、警護にあたった。同年出家。

河内源氏祖

みなもとの よりのぶ  
**源 頼信**

平安中期の武士。河内源氏の祖。源満仲の三男。母は藤原到忠<sup>れいぜんいん</sup>の娘。冷泉院判官代、

左馬権頭<sup>さまごんのかみ</sup>・治部少輔<sup>しよぶしよすけ</sup>・皇后宮亮<sup>こうごうぐうすけ</sup>などを歴任し、鎮守府将軍となる。

また、常陸介<sup>ひたちのすけ</sup>・上野<sup>こうずけ</sup>・石見<sup>いわみ</sup>・伊勢・甲斐・美濃・河内などの国守を歴任した。

長元元年(1028)の上総介<sup>かずさのすけ</sup>平忠常の乱に、追討使となった。平直方にかわり、同三年派遣されたが、翌年忠常は戦わずして、頼信に降伏した。

陸奥守 伊豫守 鎮守府將軍 (988/994～1075)

みなもとの よりよし  
源 頼義

平安中期の武将。源頼信の子、母は修理命婦。幼名は大代丸。

長元元年(1028)からの平忠常の乱では、父に従い武名をあげた。

その後、小一条院判官代として敦明親王に仕えた。相模・武蔵・下野・陸奥などの国司を歴任。

永承六年(1051)の安部頼時の反乱には、陸奥守鎮守府將軍として、追討にあたった。

頼時・阿部貞任父子の抵抗にあったが、康平五年(1062)の貞任の追討をもって前九年の役が終わりその功により翌年正四位下伊予守となった。晩年出家し、伊予入道と称された。

足利一門の祖 陸奥守 源八幡太郎 (1039～1106)

みなもとの よしいえ  
源 義家

平安後期の武将。源頼義の長男。清和源氏に属す。七歳の時石清水八幡宮で元服したので

八幡太郎と号す。父に従い、前九年の役に従事。その時の武功により出羽守に任ぜられた。

下野・相模・武蔵・陸奥・伊予・河内・信濃などの国守を務め、正四位下に叙された。

陸奥守兼鎮守府將軍として、在任中の永保三年(1083)に任国で起きた清原氏の内紛を

鎮めた(後三年の役)が、朝廷はこの戦闘を「私闘」とみなし義家の陸奥守を解任、恩賞も行はなかったため、義家は私財をもって兵士の労をねぎらった。この戦闘を通じて、東国武士の間で義家の

評価が高まり、天下第一の武勇の士と評され諸国の在地領主は田畠を義家に寄進したため、寛治

五年(1091)朝廷はこれを禁じ、翌年には義家の立てた諸国の荘園も停止した。承德二年

(1098)陸奥守の時期の功績が認められ、白河院の昇殿を許された。

式部大輔三郎～新田太郎（源義重）徳川將軍祖（1082～1155）

## 源 義国

平安後期の武将。源義家の三男。清和源氏に属す。加賀介・式部丞・帯刀長などに任じ、

従五位に叙され、下野を中心に東国に勢力を培った。

久安六年（1150）義国の郎党と、内大臣藤原実能の隨身とが乱闘し、義国の郎党が

実能邸を焼打ちしたため、勅勘を破り下野に籠居。

久寿元年出家して荒加賀入道と号した。

足利陸奥判官 足利一族太祖（?～1157）

## 足利義康

平安後期の武将。下野生まれ、源義国の三男。母は、信濃守源有房の娘。

父より下野足利荘・梁田御厨などを譲られ足利を称す。足利荘が鳥羽上皇の建立した

安楽寿院領であったので、上洛して鳥羽上皇の北面の武士となり、蔵人・右衛門尉・檢非違使に任じられた。

保元元年（1156）七月に起きた保元の乱の際には、後白河天皇方として活躍。

勲功により同年七月十一日昇殿を許され、八月六日従五位下に叙され、大夫尉となる。

法名は道達。

矢田判官代 仁木・細川両流の祖 足利太郎 ( ? ~ ~ 1 1 8 3 )

## 足利義清

平安後期の武将。足利義康の子。寿永二年源義仲と共に入京。次いで備中水島の合戦に大將軍として出陣したが、家人と共に討たれた。

矢田判官（代）と称したが、この矢田は信濃矢田荘とも下野足利荘に隣接する<sup>やなだみくり</sup>梁田御厨の

矢田ともいう。室町幕府守護家細川・仁木両氏の祖。

広沢判官代（生没年不詳）

あしかがよしざね  
足利義実

河内源氏義国流足利義清（矢田義清）の次男。

広沢義実、矢田義実とも記される。仁木氏、細川氏、戸崎氏の祖。

子は 仁木実国、細川義季、戸崎義宗。

仁木八幡太郎 仁木氏の祖

## 仁木実国

仁木又太郎

## 仁木義俊

仁木弥太郎 三河に住す

## 仁木義継

仁木二郎三郎

## 仁木師義

伊賀の仁木氏

## 仁木義勝

仁木義勝の次男 <sup>に き よ り あ き ら</sup> 仁木頼章（1299～1359）正安四年～永文四年

仁木頼章の弟 仁木義長・頼勝 猶子に 仁木頼夏がいる。

仁木二郎三郎と称し、<sup>すほうのかみ いがのかみ さきょうだゆう ひょうぶだゆう</sup>周防守・伊賀守・左京大夫・兵部大夫を歴任し、

延文三年（正平十三・1358）に出家後は<sup>どうけい</sup>道環と号した。

足利尊氏が鎌倉を発向して以来、終始尊氏と行動を共にして各地を転戦し、南軍あるいは

<sup>じょうらん ただよし</sup>観応の擾乱での直義軍と交戦し、多くの戦功をあげ五か国にわたる守護、あるいは幕府執事を

歴任するなど、揺籃期の幕府政治にあって枢要の位置を占めた。

元弘三年（1333）三月、後醍醐天皇討伐の命令を受けた足利尊氏が鎌倉を発向する

際、足利一族の末葉の一支族として供奉し、入洛後は丹波国桑田郡篠村八幡宮での六波羅攻めの旗揚げにも加わっている。

建武二年（1335）七月、信濃で北条義時が拳兵したいわゆる中先代の乱の鎮圧のため

翌月鎌倉へ下向した征討東將軍足利尊氏勢に同行、奮戦している。十一月には三河国<sup>やびき</sup>矢矧川

<sup>とおとうみくにさぎさか てごしかわら</sup>遠江国鷺坂・手越河原に東下してきた新田義貞勢と戦い敗北を喫したが、翌十二年相模国箱根

では官軍新田勢を後退させ、その後を追って翌建武三年（延元元年）正月入京した。

しかし、官軍の反抗に遭い、京都に踏みとどまることが出来ず尊氏勢はそのまま九州に敗走した。

この時頼章は、一時尊氏と別行動をとり丹波方面に向かい、尊氏の再上洛を期して兵力を補充した。三月、頼章は丹波国守護・侍大将として、丹波国内の久下・長沢・萩野・波々伯部以下主だった軍勢を統合し、氷上郡高山寺城に立て籠もって後醍醐軍の侵攻をくい止めた。

五月、摂津国湊川の合戦で楠正成敗死の報を聞き、今川頼貞とともに丹後、但馬の軍勢を相携えて入京し、六月には新田義貞、名和長年勢と洛中東寺周辺で戦い、長年を敗死させた。

十月、恒良親王<sup>つねよし</sup>を奉じて越前金崎城に敗走した新田義貞勢を追って、丹波・美作<sup>みまさか</sup>の軍勢一千余騎を率いて近江塩津を経て発向し、翌年3月落城させている。また、これ以降、丹波各地で南軍と合戦を繰り返している。

康永2年（興国四、1343）十二月丹波国守護代の萩野朝忠が謀叛の嫌疑を受け、仁木頼章は当国守護代を改替させられ、代って守護となった山名時氏が朝忠を討った。

貞和四年（1384）正月摂津国四條畷<sup>しじょうなわて</sup>の合戦では、高師直<sup>こうのもろなお</sup>の手勢に加わり七百余騎を率いて南軍楠木正行勢と交戦したが敗退した。

観応の擾乱では弟義長と共に尊氏党に属し、観応二年（正平六、1351）正月、大将高師直の指揮下<sup>ただよし</sup>に直義党の桃井勢に圧倒され、足利尊氏・義詮<sup>よしあきら</sup>父子は直義党の石塔頼房の入京を避けるため但馬路を西へ落ちて行った。この時仁木頼章・義長兄弟は、それぞれ高辻万里小路・五条坊門の自邸に火を放ち義詮に付き添って丹波国氷上郡の石りゅう寺に滞陣したが、ここで再び萩野氏以下の在地勢が味方に馳せ加わってきた。

二月足利尊氏<sup>ただよし</sup>と直義は一時和睦するが、義詮・直義両陣営では互いに疑心暗鬼を生じ、七月仁木頼章は病気と称して摂津国有馬温泉に下向してしまった。なお、この間一時所領等を没収されていた模様であるが、四月罪を許され所領も安堵された。



そして同年十月、再び義詮と不和となった直義を追討すべく、仁木頼章・義長兄弟は足利尊氏軍に随って関東に下向し、翌年正月駿河国薩多山の合戦で直義を降参させた。

観応二年十月、東国滞在中に幕府執事に任じられ、以後延文三年（正平十三、1358）

四月に足利尊氏が死去した翌月まで務めた。

観応三年閏二月 新田義興・義宗・義治らの挙兵に際しても、武蔵国に発向した仁木兄弟の活躍で新田勢に手疵を負わせ敗走させた。

文和三年十二月、足利直冬挙兵に応じた山名時氏・師氏父子が<sup>ほうきのくに</sup>伯耆国より山陰道を上って丹波に差し掛かった際、当国守護として氷上郡佐野城にあったが、直冬勢を制しきれずと見るや戦わずして通過させてしまい、世間の嘲笑を買ったという。

文和四年二月、京都市中での両軍の合戦では、東山に陣取った足利尊氏勢に呼応し、丹波・丹後の軍勢三千騎を従えて嵐山に陣取り、会けいの恥をすすいだ。

延文四年十月十三日死去。（61歳）

伊勢守右京大夫 仁木二郎四郎

仁木義勝三男 <sup>に き よしなが</sup> 仁木義長 (? ~ 1376年10月23日) 生年不詳 ~ 永和二年9月10日

室町時代前期（南北朝時代）の武将。仁木義勝の第三子で、兄 頼章、弟 頼勝がいる。

仁木二郎四郎と称し、越後守・<sup>うまごんのかみ</sup>右馬権頭・<sup>しゅりのすけ</sup>修理亮・<sup>うまのすけ</sup>右馬助・<sup>うきようだいふ</sup>右京大夫を歴任した。また、伊賀・伊勢国をはじめとして六か国に及ぶ守護職を歴任し、康永三年（興国五、1344）と観応元年（正平五、1350）の二度にわたり侍所頭人<sup>さむらいどころとうにん</sup>に任じるなど、兄 仁木頼章と共に南北朝時代の幕府政治に活躍した武将の一人である。

元弘三年（1333）三月。足利尊氏が後醍醐天皇方を討つべく鎌倉を発向した際、兄 仁木頼章と共に<sup>くぶ</sup>供奉して以来、はじめのうちは兄弟共に行動することが多かった。

建武二年（1335）七月、信濃でおきた中先代の乱の鎮圧に兄弟で、足利尊氏に随行して鎌倉に下り、同年末の三河国矢矧<sup>やびきがはら</sup>河原の戦いや相模国箱根の戦いに活躍した。

建武三年（1336）二月京都入京後、新田義貞勢に敗れた、足利尊氏らと共に九州に赴き、筑前国多々良浜の合戦で菊池武敏を破り九州経略の勝機を得た。

四月足利尊氏東上後<sup>いっしきのりうじ</sup>も一色範氏らと共に九州に留まって、菊池氏らの反幕府勢の反抗に備えた。

六月一応の目的を遂げた仁木義長は九州の青方一族を引き連れて上洛し、足利尊氏勢に合流。

観応元年（正平五、1350）観応の擾乱に際しては、兄仁木頼章と共に足利尊氏方として、十二月には佐々木高氏と共に赤井河原に発向し、<sup>ただよし</sup>直義党の<sup>せきとうよりふさ</sup>石塔頼房対峙している。

観応二年（1351）正月、直義方の桃井直常勢と四条河原に戦い、一時桃井勢を退却させたが洛中に於ける形勢が不利となり、仁木義長は五条坊門の自邸に自ら放火し、再び西へ落ちた。

この時仁木兄弟は義詮と共に丹波国石りゅう寺に留まり、当国の軍勢を整えて足利尊氏の再入洛に備えた。二月、尊氏・直義・義詮の三人は京都で一旦和睦し、四月に兄仁木頼章共々幕府の

宥免を得て所領を安堵された。しかし、その後も尊氏方と直義方との武将間で不和が絶えず、結局仁木義長は伊勢方面に下ってしまった。「園太暦」の伝えるところによれば、当時領国であった伊賀国に逐電し、兵を募って伊勢守護石塔頼房を討とうと謀り、伊勢国で両者合戦におよび、仁木義長の舎弟 仁木修理亮義氏しゅりのすけよしうじが討ち取られたという。

八月、直義追討の宣旨を受けてわずか三百騎足らずで近江に出陣した足利尊氏勢に、仁木義長は伊勢・伊賀の四千余騎を率いて馳せ加わり、程なくその軍勢は一万余騎となって、直義勢を北陸道から鎌倉へ敗走せしめた。

十月再び直義追討の宣旨せんじを破った足利尊氏勢に随い、駿河国薩多山に戦って直義勢を降参せしめ、兄 仁木頼章と共に直義の身柄貰い受けの使者となった。

同三年閏二月に新田義貞の二男新田義興よしおきらが上野国で挙兵したときには、兄仁木頼章と軍を共にし、新田義興よしおき勢を散々に打ち破った。

文和二年（正平八、1353）三月には、佐藤元清を配下として河内国東条で南軍と戦ったが、三月には摂津国で敗れ早々に帰洛している。

文和三年（1354）十二月の洛中合の合戦では、義詮に伴って西七條の辺に陣取り、土岐頼康らとともに桃井直常・赤松氏範らと、七條河原に戦った。

延文三年（正平十三年）十二月新将軍となった義詮は、吉野方への総攻撃を行い勝利した。

仁木義長は舎弟仁木頼勝らと参陣し、摂津国西宮に三千余騎の兵を結集させた。この時の幕府軍の総指揮は細川清氏であったが、仁木義長とは伊勢国守護をめぐって年来対立関係にあり、今度の戦闘でも細川清氏らに非協力的な態度を取ったことから、日頃の傍若無人の振る舞いも災いして、細川清氏・畠山国清ら諸将の反目を買ひ、幕政から排斥される結果となった。

延文四年（正平十四年）十月、近江国甲賀郡内柏木荘・檜物荘・蔵田荘・宇治河原等の所領について、観応二年並びに文和に年の下文の旨に任せて、佐々木氏頼の競望を斥けるべく、足利義詮より仁木義長に安堵された。

延文五年（正平十五年）七月、畠山・細川氏らは南北方の蜂起を鎮めるためと称して摂津天王寺に七千の兵を集めて仁木義長を討伐せんと謀り、仁木義長は將軍足利義詮を奉じて対抗しようとしたが、佐々木道誓<sup>どうよ</sup>の奇計により足利義詮に脱出されてしまい、逆に幕府の追討を被る結果となった。結局力尽きた仁木義長は自邸に火を放ち、僅か三百余騎を率いて伊勢国へ没落していった。

伊勢国下国後初めのうちは加担する者もいたが、佐々木氏頼らに攻められ、一族の中には降参する者も出、伊勢国安芸郡長野城に立て籠もること三年の長期に及んだ。長野城は堅固な城であったが、大敵に囲まれ兵糧が乏しくなり、随う者も減少するにつれ、康安元年（正平十六、1361）とうとう南朝に降るべく使者を送った。仁木義長<sup>にきよしなが</sup>の降り<sup>に</sup>を容れるか否かで南朝内部<sup>けんけんごうごう</sup>に喧々囂々の議論が起り、「於悪行八天下第一の僻者<sup>くせもの</sup>ゾ」と評されて一応許された。その後も伊勢・伊賀両国は、土岐・仁木両陣営<sup>きたばたけあきのぶ</sup>の対立に加えて、国司北畠顕信が兵を出し三つ巴の様相を呈し、最終的には貞治五年（正平二十二年、1366）仁木義長は幕府に降り<sup>に</sup>を乞い、付き従う者なく入京し幕府への帰参を許された。この年の八月、斯波高経<sup>しばたかつね</sup>とその子 管領義将・侍所頭人義種らの失脚の結果、仁木義長の甥 仁木頼夏<sup>にきよりなつ</sup>が侍所頭人に就任し、仁木義長も一時短期間ではあるが、伊勢国守護を回復している。

仁木義勝四男 **仁木頼勝** (生没年不詳)

仁木五郎・讃岐守・弾正少弼などを称す。

延文五年（正平十五、1360）七月に細川清氏を首謀者として計画された、仁木義長排斥事件の際には、仁木義長らは初め將軍足利義詮を奉じ、仁木頼勝は兵一千余騎を率いて京都東寺の辺りに陣を張った。しかし、足利義詮に逃走され、逆に足利義詮から追討を被る結果となり、敵の大軍が近づくや、兄 仁木義長の計らいで、長坂峠（京都洛北鷹峰から丹波国桑田郡周山方面へ出る坂道）を越え一時丹後へ落ちのびた。

康安元年（正平十六、1361）細川清氏が失脚すると、仁木頼勝は但馬守護に補された。

貞治元年（正平十七、1362）十一月、山名師氏・氏清兄弟や山名家の執事小林重長らが侍大将として二千余騎を従え、大山から播磨へ越えようとしたとき、仁木頼勝は但馬国住人 那波十郎左衛門の加勢を得て山名勢に抵抗した。

貞治二年（正平十八、1363）九月に山名時氏が幕府に帰参、山陰道一帯に覇をとなえるようになると、仁木頼勝の但馬国の分国支配も容易ならざるものとなった。

仁木頼直の長男 仁木義有<sup>に き よしあり</sup>（生没年不詳）

（「仁木文書」、なお「尊卑分脈」では義直を長男とする。）仁木弥太郎、伯耆守<sup>ほうきのかみ</sup>を称す。

建武三年（延元元年、1336）九月当時摂津国大将と呼ばれていた仁木義有は、同国の有力寺院である勝尾寺を北朝方に引き入れるため、同寺と寺領をめぐって対立していた浄土寺門跡領の同国高山荘に、勝尾寺衆徒と共に討ち入っている。この後、摂津守護として赤松範資<sup>あかまつのりすけ</sup>の在職が知られ、当時、赤松・仁木両氏は摂津国守護・大将として補され、国大将である仁木義有は当国の軍事的措置につき主導権を有していた。

観応元年（正平五年、1350）十二月十八日、仁木義有は弟の仁木義直・氏義らの旧領を足利尊氏によって預けおかれている。（仁木文書）

さむらいどころとうにん  
侍所頭人

細川和氏が実父

にきよりなつ

仁木頼夏

(生没年不詳)

室町幕府執事仁木頼章の猶子となる。仁木三郎、左京権大夫、中務少輔を称し、正五位下に叙せられた。貞治五年（正平二十一、1366）に侍所頭人となる。

延文五年（正平十五、1360）七月、細川清氏らが仁木義長の幕府からの排斥を画策して摂津国天王寺に兵を集めた時、仁木頼夏は仁木義長の側近くにあつて將軍足利義詮<sup>よしあきら</sup>を奉じ京都四條大宮に陣を張った。この時仁木頼夏は足利義詮を警護する任にあつたが、佐々木高氏の策謀にかかり、足利義詮<sup>よしあきら</sup>に西山へ逃げられてしまい、逆に足利義詮の追討を被る羽目となった。戦わずして情勢の不利を悟った仁木義長は舎弟の仁木頼勝を丹後へ、仁木頼夏を唐びつ越の間道から丹波へ落ち延びさせた。丹波へ脱出してからの仁木頼夏は幕府からの召喚にも応ぜず、將軍足利義詮は細川頼和を丹波へ向かわせた。

康安元年（正平十六、1361）九月になって、細川清氏と佐々木高氏との不和が表面化すると、当時すでに幕府に帰参していた仁木頼夏は、かつての敵であった細川清氏方（頼夏は清氏の舎弟）につき、結果細川清氏が若狭に敗走すると、一時京都に留まって後伊勢に落ちて行った。

このような世上騒然となり、「一方ナラヌ蜂起ニ、京都以外ニ周章シテ、スハヤ世ノ乱出来ヌト危ヌ人モ無リケリ」という有り様であった。細川清氏に呼応して南朝方に降った仁木頼夏は、伊勢から京都に上がり、康安元年（正平十六、1361）十二月に丹波に出兵したが、猶子であった仁木義尹<sup>にきよしたか</sup>とまさに骨肉相食む戦いに敗北して京都へ逃げ帰った。

仁木頼章の実子 <sup>にきよしたか</sup>仁木義尹（生没年不詳）仁木頼章の猶子 <sup>ゆうし</sup>仁木頼夏の養子となる。

仁木三郎、<sup>ひょうぶだゆう</sup>兵部大輔を称す。

康安元年（正平十六、1361）九月、幕府管領細川清氏が守護代頓宮四郎左衛門尉を頼  
って分国若狭へ逃げ小浜の城に立て籠もった時に、丹波守護仁木義尹は搦手の大将として山陰

道の軍勢三千余騎を率いて、任国より若狭国境の逆谷へ向かった。ただし、「後愚味記」では

九月二十六日のこととして、「今日丹州守護仁木三郎（義尹）下国、其の勢百騎許伝々、於国  
人者出立下向若州」とある。因みに討つての大将は斯波氏頼あるいは石橋和義であった。

康安元年（正平十六、1361）十二月二十四日南朝軍が京都に迫った際には、仁木義尹は  
分国丹波で養父仁木頼夏の勢を打ち破り、次いで山陰道の兵七百余騎を率いて京へ攻め上がり、  
南朝軍を京より追い出した。

貞治元年（正平十、1362）には、山名勢が但馬・丹波・播磨への進出を窺ったが、丹波守  
護仁木義尹は天田郡和久郷（京都福知山市）に陣取り、幕府からも若狭・遠江・三河三か国の  
守護勢三千余騎の援軍を得て、辛うじて撃退し伯耆へ追い返すことができた。

応安元年（正平二十三、1368）九月、南朝勢の権大納言西園寺某らに与して伊予国で  
反抗に転じた地元の豪族河野道直一味を追討すべく、幕府は仁木義尹を派遣し、十九日伊予高  
山、二十三日伊予八倉に陣取ったがいずれも河野方の攻勢の前に敢え無く撃退されてしまった。

応永三年（建徳元、1370）～応永六年までは引付頭人の一員として所務関係の訴訟を取り  
扱っている。



仁木義長の子<sup>に き よしかず</sup>仁木義員（生没年不詳）

<sup>ひょうぶしょう</sup>兵部少輔を称す。

仁木義長の子で満長とは異腹の兄にあたる。はじめの内出家していたがのち還俗した。土橋とも称す。

応永三年（1396）七月、当時仁木氏の惣領であった舎弟仁木満長が帯していた伊勢国守護を強く望んで、幕府より守護職<sup>みつおこな</sup>を充行われた。これに不満を抱いた満長との間で深刻な対立となり、一時洛中は騒然となった。管領斯波義将<sup>しばよしまさ</sup>の説得により一件落着したが、結果仁木満長は、伊勢国へ下向する途中で没落し、出家遁世してしまった。

応永六年（1399）十二月、和泉国守護大内義弘は同国堺で大軍を率いて謀叛を起こし没落した。

（応仁の乱）義弘滅亡後の翌年正月から応永十年ごろまで仁木義員<sup>よしかず</sup>が守護職<sup>こうようい</sup>を獲得し、光用因幡入道<sup>なばにゆうどう</sup>を守護代としている。

そもそも室町時代の代表的な対明貿易港堺を控えた和泉国守護職に、当時有力守護家ではなくなっていた

仁木氏の中から仁木義員<sup>よしかず</sup>が補任された理由は、將軍足利義満の小守護家優遇政策のためとも、有力守護家間の相互牽制の結果とも言われている。

## 仁木<sup>みつなが</sup>満長（生没年不詳）

仁木義長の実子で右馬助・越後守を称す。

喜慶二年（元中五、1388）五月、土岐満貞と詮直・康行らとの間で起きた一族間の内紛に際し、將軍足利義満は康行追討の兵を送り、明德元年（元中五、1390）閏四月土岐康行は一旦没落した。この結果仁木満長は、かつて伊勢守護であった父仁木義長の没落地再給付の原則にしたがって伊勢守護となった。

その後土岐康行が再度伊勢守護に補されるが長くは続かず、仁木満長が伊勢守護に還保された。

応永三年（1396）七月、山城守護結城満藤の申し沙汰により、当時仁木家の惣領であった

仁木満長は伊勢守護を改替され、かわって僧籍から還俗した仁木満長の庶兄土橋某（仁木義員）に与えられた。これを不服とする仁木満長は京都で騒擾を企てたが果たさず、そのまま京都を落ちて出家遁世した。

越後守右馬助

仁木満将

右馬助

仁木教将

右馬助

仁木成将

右馬助 丹波国城主 仁木右京之進

## 阿波仁木氏 主要人名録

### 仁木貞長（生没年不詳）仁木二郎四郎左衛門尉直孝 阿波仁木氏の祖

丹波国城主で仁木右京之進と称する。足利一門で同族である阿波守護細川讃岐守持隆に仕え阿波では下八万・渋野・立江を知行地として与えられていた。

### 仁木高長（生没年不詳）阿波仁木家初代

仁木<sup>うきょうのしん</sup>右京之進の<sup>ゆうし</sup>猶子で仁木左衛門尉源高長と称す。

父仁木右京之進が、細川讃岐守持隆に仕えその兄弟である仁木高長・高将が阿波に来往する。

「阿波志」では「上大野城永禄年中、源高長（仁木左衛門）此に拠る。」

「山上にある祠は左衛門尉を祀るもの」としている。さらに、「高長、永禄八年（1565）三月京師よりいたる兵百三十、大野三村を領す。子高持・式部大輔（三代仁木式部）と称す。

孫持吉（四代仁木直之）亦式部大輔という。三子あり、長子師高（五代仁木彦太郎）

次を高成という。次を長俊という。」とある。

仁木高長は永禄八年に現在の上大野町城の内に居住し、この地を府中と称し、城下の町に牛王町・上町・袴町・二の町などの名をつけた。さらに権現山の山頂には砦を築いた。後に高長の猶子が二代仁木左衛門尉を継承したため源直孝と改名する。城跡には現在調練場跡（山頂より三十m下方）が残っている。

小松島市櫛淵町、仁木家初代。法泉寺東下に墓がある。長曾我部元親の阿波侵略により、孫直之が背に石を負い矢を避けながら落ち延び逃走したと伝わる石板が墓の裏に立っている。

に き たかまさ  
**仁木高将**（生年不詳）仁木（貞永）右京之進の二男で仁木高長の弟。

仁木日向守高将と称す。名東郡花房城主。

天文二十一年（1552）八月、阿波守護である細川持隆は、阿波国を実質的に支配していた執事の三好義賢に殺害され阿波・讃岐の実権は、三好氏へ支配権が確立されるのである。

それに対して、芝原城主久米安芸守義広は三好義賢の行動を激しく非難し、三好義賢を討つために兵を挙げ翌二十二年（1553）初めに野田山城主野田内蔵助・花房城主仁木日向守高将・佐野須賀城主佐野丹波守・蔵本城主小倉美濃守重信らと共に軍事行動を起こし、三好義賢の妹婿のいちのみやなりすけ一宮成祐を攻撃するなどしたが、やがて三好義賢が三千の兵を率いて進撃してきた。

久米義広・仁木高将らは槍場（徳島市国府町東黒田）でこれを迎え討ったが、多勢に無勢、三好義賢の軍に囲まれ、そのほとんどが討死した。この戦いを槍場の義戦（久米の乱）といい、阿波の古戦記を語るに欠かせない戦として今に伝えられている。

に き い が の か み  
仁木伊賀守 (生年不詳～天正十一年 1582)

仁木高長の弟で（仁木氏の家老を務めた、庄野伊賀守が高長の養子となり、仁木伊賀守となったともいう。）中大野城城主。

「阿波誌」では「仁木伊賀守此に拠る」とあり、「細川掃部頭真之<sup>かもんのかみさねゆき</sup>に仕えて至忠、細川真之の殺されるや遺児細川之照<sup>ゆきてる</sup>を抱いて逃れ、これを足利氏（平島公方）に託す。」と出ている。

「細川家記」には、細川真之は仁木伊賀守の娘（弥生）を愛していたが、懐妊七か月となつたので、ひそかに妻の叔父である那西郡の仁木左衛門の元へ落ち延びさせたとある。

生まれた子が仁木六郎である。仁木六郎は成人して紀伊広浦城主畠山左衛門高政の養子となり、畠山石見守之照と改名した。之照は祖父細川持隆・父真之の仇である三好氏を滅ぼすために、長曾我部氏に合力して、中富川の合戦に従軍した。後に長曾我部元親の悪逆に愛想をつかして離叛し、伊賀守もこれに従ったため、天正十年に長曾我部氏の軍勢に襲われ、上大野城で死亡したという。また、伊賀守一族が現在の下大野町まで落ち延び、戦死した者たちを「十六人塚」として祀っていたが、現在その所在は確認できない。

にきさえもんのじょう  
**仁木左衛門尉**（生年不詳）阿波仁木家二代

仁木高長の猶子で二代左衛門尉となり、父と同名を名乗る。

にきしきぶ  
**仁木式部**（生年不詳～天正10年 1582）阿波仁木家三代

仁木高長の二男で仁木式部大輔と称す。

兄の二代 仁木左衛門尉さえもんのじょうに子がなかったため、阿波仁木家三代目を継承する。

天正十年（1582）上大野城落城の時、仁木式部大輔は、久留米田を通り、那賀川対岸の楠根（那賀川下流左岸）に落ち延び、南条で戦死している。

現在ある式部神社は里人が式部大輔の死を悼んで祀ったものと言い伝えられている。

亦式部大輔 三郎右衛門

にきなおゆき  
**仁木直之**（生没年不詳）阿波仁木家四代

仁木式部大輔の猶子で、仁木三郎右衛門源直之（亦式部大輔）と称す。

旧主細川氏の跡を追って仁木氏に属する十戸と共に櫛淵村に来村居住し、その子孫が櫛淵町に居住している。

法泉寺に、上大野城主祖父源直孝（高長）の墓を建立する。

墓石には、上大野城主仁木左衛門源直孝、四代孫仁木三郎右衛門源直之建立とある。

に き よしはる  
仁木義治（永禄八年1565～承応二年1653）

仁木高将の子孫、紺屋司。守護細川家の被官。

伊勢の出で仁木高将の時阿波に移る。

板野郡勝瑞城下に住んでいたが、天正十年、長曾我部元親に攻められて勝瑞落城のあと隠棲していたが、天正十三年に蜂須賀家政が阿波に入部すると、家政に請われて徳島城に移住し、福島町に屋敷が与えられた。そのとき商人となり、家政から紺屋司に任じられ、呉服又五郎と改名して、阿波一円の紺屋、灰屋からの租税を徴収した。

慶長五年（1600）関ヶ原合戦のとき、阿波を豊臣家に返上した蜂須賀家政が高野山に脱出したとき、徳島城を受け取りに来た小早川隆景らの軍勢に対して城を引き渡し、蜂須賀家政の正室生駒氏を富岡に無事護送するなど大いに活躍した。

その後出家して仁鬼島道知齋と号し、寛永十二年勝浦郡大原町に隠居して、三好時代の見聞録である「昔阿波物語」を書きあげた。



喜右衛門

仁木彦太郎 阿波仁木家五代

仁木甫左衛門 阿波仁木家六代

仁木伊左衛門 阿波仁木家七代

仁木家山安休 阿波仁木家八代

仁木式衛門 阿波仁木家九代